

八重山地区普及活動状況

水産業改良普及員 伊禮 勇 雄

I. 漁 船 漁 業

1. 一本釣巻揚機の導入

イ. 目 的

現在、5t未満の小型一本釣漁船の漁場は主に水深200～400mで操業中の揚網時間と労力のウェイトが大きい。

そのため、従来使用している手動式巻揚機に代る自動巻揚機に切換するには小型でなければならぬと思ひ先進地やメーカーから何回となくとりよせ適応化改良したが、適するものはあつても、なかなか商取引する事が出来なかつた。

然し、今回マチ釣漁業研究会と一緒に、あるメーカーに依頼した処、新日海工業株式会社のYM-SF漁一番の巻揚機が小型で軽量であり、又12Vのバッテリーでも節電する事が昭和52年4月8日の乗船適応化で判明した。

さっそく、漁協を通して共同購入にふみきり、値段17万円の処を15万5千円にし、これでも漁民負担が大きいので、石垣市水産係に相談した処、昭和52年度の予算に300万円計上された。その結果、現在60台普及している。

ロ. 結 果

導入した巻揚機について、乗船テストした処、次の事が判つた。

- | | | | | |
|----------------|--|--|--|--|
| (1) 労力の省力化 | | | | |
| (2) 小型漁船に据付が容易 | | | | |
| (3) 操業回数が増 | | | | |
| (4) 漁業生産の向上 | | | | |

ハ. 今後の問題点

この巻揚機は値段が高く普及できる否か問題であつたが、この巻揚機の利点を漁業者に説明した。例えば、この巻揚機の耐久性、揚網時の減速など1人で2台も操作操業が可能で、将来漁獲生産向上に役立つ点など、こう云つた時点で立ち指導した。然し、今後改良すべき点は次のとおりである。

- (1) まず普及するには値段が高く、本県のような亜熱帯では、今の巻取板では変形するので強化プラスチックへの改良が必要である。
- (2) スイッチが完全防水でないため改良。
- (3) ギヤーが高、低、ニュートラと入りにくい。
- (4) 糸案内がないため道糸の消耗が大きい。

II 浅海増養殖

1. モズク網養殖

イ 目的

モズクは八重山水産物の中でも換金海産物として最も大きな柱であり、昭和52年の天然モズクは382しで金額にして9千3百万円余でした。

然し、天然モズクは天気の異変により、生産が左右される事があり、網養殖による実施がモズクの安定生産をなす。

その事を踏まえ、昭和52年度1月に天然採苗によるモズク網張り養殖試験が伊原間漁友漁業研究会により成功した事が波及し、今年度は八重山モズク採取組合を中心に10グループに分け200枚づつ網張りを行なった。

ロ 結果

網養殖の一番の魅力は、來雑物が少く選別しやすく、労力の省力化と生産性が高い。

残念ながら、今度、天然採苗した網2,000枚は暖冬異変により、天然モズクの着生が遅く、地域によって孢子着生がまばらで、約半分の網が現在、5cm程度、伸びているのが現状であります。次年度からは専技講習会等を開催し、人工採苗による網張り養殖を試みたい。

下記の表は伊原間漁友漁業研究会による天然採苗モズク網張養殖試験の結果です。

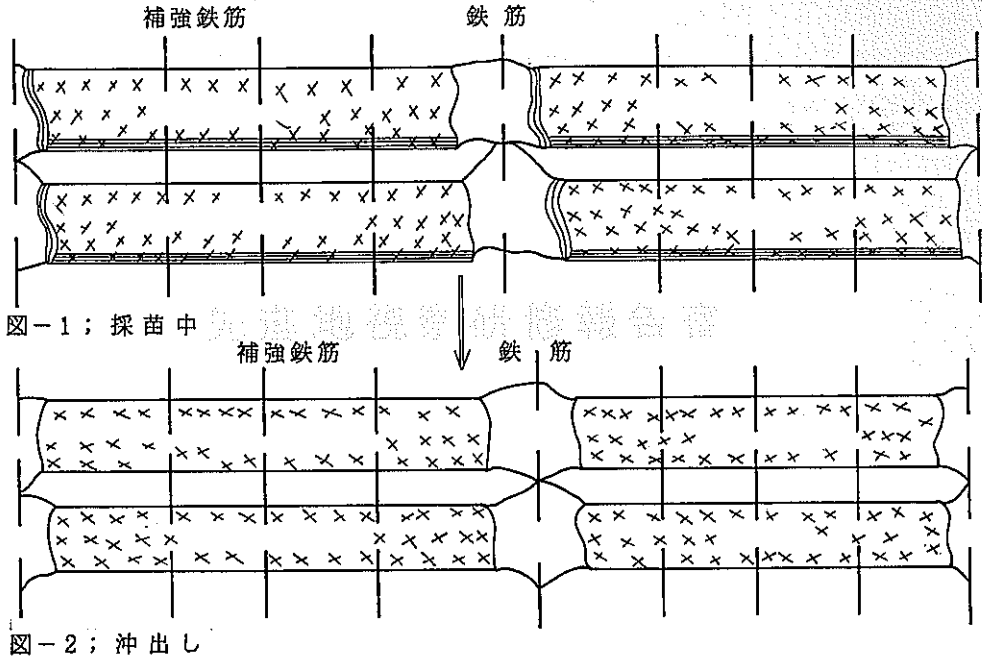
網張り（採苗）は昭和52年1月6日実施

生産回数	生産年月日	網枚数	生産高	生産額
第1回	3月7日	107	3,460 kg	848,360 円
2	4月4日	132	3,042	852,336
3	5月11日	132	2,345	558,110
計			8,847	2,258,806

ハ 天然採苗と沖出方法

- (1) 天然モズクが着生している所を苗床とし、苗床に4分鉄筋（90cm）の杭を四方に打ち込み、網を3～5枚重ねにし張っていく。
- (2) 苗床に網張りしていく注意として、その網が雑藻類においかぶされない様、床面より約30cm程度の高さを保ち、図1の様に補強杭を打ち込む。
網に雑藻類がおいかぶさった場合、孢子が着いても成長が遅い（太陽光線との関係）
- (3) 採苗中、網が干潮時でも干出ししない事。
- (4) 網と網の間をヒモで結び強く張っていく。
- (5) 網に孢子が着生しているが、いつも注意しながら観察し、網に5mm程度のモズクが着生していると沖出作業にかかる。
- (6) 沖出しの注意として、着生したモズクを潰さない様、丁寧に持ち運び、又直射日光を避け、網を海水にしたしながら運ぶ事。

- (7) 沖出しする場所は藻類の多い所で、図2の様に1枚1枚四方に張り、補強杭を打ち、網と網との間をヒモで強く結び、床面よりある程度(30cm)の高さにし、他の雑藻類を避ける。
- (8) 養殖中も採苗中と同様、養殖網が干潮時でも、干出ししない様、海面より下げる。



2. ウニの移殖放流

イ 目的

年々枯渇しつつあるウニ資源を回復するため、漁民、自ら立ち上りウニ組合を結成、52年度9月に7万個の稚ウニを竹富島西周辺と石垣漁港西周辺の藻場地帯へ放流した。

ロ 今後の課題

移殖放流した場所を3年間、採取禁止する事により、ここを種場し波及効果を考え、今後は採取期間(5月1日~10月31日)の縮小も検討する余地がある。

又、採取するウニの大きさや、ウニ漁場の輪作方式採取方法等、いろいろな面で規制し、ウニ資源回復と流通販売方法を探求する必要がある。

III グループ活動状況

モズク組合が結成された事により、ウニ組合の結成となり、併せて漁協青年部の組織化など八重山漁協の傘下の基でこれらの組織が活発に動き、今や八重山の水産業の発展は間違いないものと確信するものである。

最近では青年部が会議室設置を組合長に相談した処、その事が実現し、青年部機関紙、「サンゴ礁」まで発行する様になりました。